Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2012年6月12日

献学60周年記念礼拝

ICU

60th Year

献学60周年記念事業

国際基督教大学

ICU献学60周年記念事業　2012年6月12日（火）

【献学60周年記念礼拝】
司式：永田 竹司牧師
讃美歌：第321番「いつくしみ深き」
聖書朗読：「ペテロの第一の手紙　第4章10節–11節」　永田 竹司牧師
礼拝説教：理事長　北城恪太郎 「賜物を生かす道」

2012年6月12日、完成から約60年に渡り本学の歴史を見守ってきた礼拝堂にて、永田牧師司式（写真右）のもとに献学60周年記念礼拝が行われた。

大学オルガニスト菅氏が奏でる荘厳なオルガンの前奏の中、本学学生、大学教職員、またこの記念礼拝の日にあわせて行われた、「ご入学50周年記念祝賀会」に参加した約40人の10期生をはじめとする同窓生ら、計約300人が席を埋め尽くした。礼拝は永田牧師による祈りで始まり、参列者一同による賛美歌「いつくしみ深き」の合唱、聖書からは「ペテロの第一の手紙　第4章10節–11節」が朗読された。

続いて行われた礼拝説教では、本学北城恪太郎理事長が「賜物を生かす道」と題し、「６０年前に、ICUを献学した先人たちは、何も無いところからICUを作られたのです。私たちは、常にその苦労を思い出さなければなりません。ICUに連なる私たちが、それぞれが持つ優れた賜物を生かし、喜びをもって神様の示す道に従って、助け合うことによって、ICUは前進できるのです」と、参列者を前にメッセージを述べた。

賜物を生かす道

理事長　北城　恪太郎

国際基督教大学の献学60周年の記念礼拝で皆さんにお話できることを大変嬉しく思っています。

まず始めに、いつも私を励ましてくださる御言葉を、お読みします。　ペテロの第一の手紙4章10節から11節です。

「あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互いのために役立てるべきである。　語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語り、奉仕する者は、神から賜る力による者にふさわしく奉仕すべきである。　それは、すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神が崇められるためである。　栄光と力とが世々限りなく、彼にあるように、アーメン」

このペテロの第一の手紙は、イエス様が昇天された後に、初代教会の指導者になったシモン・ペテロから、「ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジャおよびビテニヤ」の各地に離散して寄留している人に向けて書かれています。

歴史によれば、紀元70年ごろエルサレムはローマに占領されていて、イエス・キリストを信じるユダヤ人は全世界に散らされていったようです。　ペテロの第一の手紙の1章の１節には、「離散して寄留している人たち」と書かれていますから、これらの人達は、信仰のゆえ、自分の家を追われて逃げてきた人達なのだと思います。

さらに、2章11節から12節において、ペテロは、「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。　あなたがたは、この世の旅人であり寄留者であるから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい。　異邦人の中にあって、立派な行いをしなさい。　そうすれば、彼らは、あなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派なわざを見て、かえって、訪れの日に神を崇めるようになろう。」と書いています。

各地に散らされた人々は、知らない土地で、神に従う生活を始めたようですが、しかし、何故、これらの人達は、家を追われても信仰を持ち続けていることができたのでしょうか。　それは、イエス・キリストの弟子であった使徒たちでさえ、キリストが神の子であることに確信が持てなかったにもかかわらず、死から復活した主イエス・キリストに接した時に、弟子たちが確信を持って力強く、キリストの存在の証人として、語ったからではないかと思います。

それは、ヨハネによる福音書の20章25節以下に書かれている、十字架の上で死なれ、そして復活されたイエス・キリストに対する疑いの気持ちを持ったトマスが、実際に復活されたキリストに接して、確信を持てた様子から知ることができます。

. . .イエスが入って来られ、中に立って「安かれ」と言われた。　それからトマスに言われた。　「あなたの指をここにつけて、私の手を見なさい。　手を伸ばして私の脇にさし入れてみなさい。　信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」トマスはイエスに答えて言った。「わが主よ、わが神よ。」　イエスは彼に言われた。「あなたは私を見たので信じたのか。　見ないで信ずる者は幸いである。」

私が、社会人としての歩みを始めた年に洗礼を受けた時にも、私たちは、神様を目で見ることはできないけれども、イエス・キリストに従って歩んだ弟子たちが、復活されたイエス・キリストに出会ったことで、力を得て、確信を持ってキリストの証人となったことは、神様の存在を信じる大きな支えになりました。

そして、使徒行伝1章8節には、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となるであろう。」と書かれているように、キリストの存在の証人として、弟子たちは、エルサレムから各地に確信を持って出かけて行きました。　その弟子たちの力強い証しと、行いによって、キリストを信じたキリスト教徒は、社会の中では離散して寄留しているマイノリティであっても、神の国を求める心で、信仰生活を歩んできたのだと思います。

現在の日本においても、キリスト教徒はごく少数のマイノリティとしての存在です。キリスト教徒は人口の１％も居ないかもしれません。　私たちは、キリスト教徒ではない人に囲まれて生活しているのですが、 必ずしもペテロの手紙が書かれた時代のよ

うに迫害を受け、職業を失って逃げなければならないわけではないと思います。その意味では、大変恵まれているとも言えます。

しかし、第二次世界大戦の中の日本においては、キリスト教徒が信仰を守る事の難しい時期でした。　人によっては、信仰の故に投獄されましたし、自分の信仰を曲げなければならなかった人達が沢山いたことでしょう。　これは、あたかもローマ人によって、キリスト教徒が迫害を受けていたのと変わらないのかもしれません。　信仰の自由が尊重されている現代に生きる私たちには想像できない苦難があったことと思います。　また民主主義は弾圧され、人権が守られなかったのが、戦時中の日本でした。しかし、その中でも、復活されたキリストを信じ、堅く信仰を守ったキリスト教徒がたくさんおりました。

こうした苦難の後に、戦争が終わり、当時の日本人のキリスト教徒が中心となって、アメリカのキリスト教徒の支援を受け、さらに多くのキリスト教徒以外の人々と企業の寄付によって、超教派のキリスト教大学として、ICUは献学されました。

ICUは未完の大学として、常に前進する、進歩する大学を作りたいとの熱い思いを持って設立されました。　献学から間もなく、60周年を迎えようとしています。この間には、大学の運営面、キリスト教に基づく教育の在り方、財政面など多くの問題が起こりましたが、その時々の教員、職員、学生、保護者、卒業生などの多くの人々の働きがあって、今日のICUが存在しています。　私は、初代学長の湯浅八郎先生も、初代理事長の東ヶ崎潔氏も個人的には知りませんが、これらの先人は、多くの困難に遭遇しても、何も無いところに、日本と世界の平和と発展に貢献する「神と人に仕える人材」を育成する大学を作るというビジョンと、神様の導きによって、それぞれが持つ賜物を生かして、現在のICUの基礎を作ってくださったのだと思います。

それでは、私たちは、自分がどのような賜物を神様から与えられているか、良く知っているのでしょうか。　私は、コンピュータのソフトウェアを作る技術者として会社で働き始めたので、自分に与えられた賜物は、コンピュータのソフトウェアを作る力だと思っていました。　しかし、神様から与えられた道は、技術者として生きる道ではなく、ビジネスの世界で、営業として、また管理者として生きる道でした。　ビジネスの世界においてもキリスト教徒はマイノリティです。　決して、初代の教会が作られた時代のような迫害を受けたわけではありませんが、私の周りの人の生活は、神の国を目指して歩む生活とは異なるものでした。　しかし、仕事の歩みの中で、岐路に直面した時に、神様は具体的に進むべき道を示してくださいました。　それが聖霊による導きだと信じています。　聖霊の働きは、聖書の多くの箇所で語られているように、大変具体的な進むべき道でした。　36歳で、初めて管理職になり、初めて営業も担当することになった大型の商談では、大変厳しい状況となりました。　徹夜で仕事をすることもありましたが、ペテロ第一の手紙にあるように、自分には与えられた賜物があり、その賜物を生かして努力する時には、全ての結果は神様が用意していてくださるのだという確信に励まされました。　2年間の努力の後に、幸い受注に成功しました。　また、48歳で、日本アイ・ビー・エムの社長になった時も、日本アイ・ビー・エムの歴史の中で、初めての赤字決算をしなければならないような状況で、眠れない夜を過ごすこともありましたが、ここでの聖書の御言葉に励まされて乗り越えることができました。　こうした苦労は、エルサレムを追い出された初代教会のキリスト教徒の苦労とは比較できないほど少ないものかも知れませんが、どんな時にも、

自分に与えられた賜物を生かして努力することへの励ましとなりました。　こうして、自分では思っても見なかった賜物を見い出し、不思議な神様の導きによって会社の経営者となり、本日は、このICU教会で皆さんにお話しさせていただいているのです。

ICUはキリスト教徒ではない学生、教職員も含めて、一つの共同体、いわゆるICUコミュニティーを作っています。共同体ということは、その構成員である私たち、一人ひとり担わなければならない役割があるということです。

共同体の構成員は、それぞれが持つ賜物と経験、知識を生かして、互いに仕えあわなければなりません。教員は、それぞれが持つ賜物を生かして、教育、研究に励まなければなりません。　それが使命なのです。　職員は職員としてそれぞれの立場で、賜物を生かして、創意工夫を行い、より良い大学運営を実現する使命があります。　また、理事もそして私、理事長もそれぞれの賜物と、社会における経験、知識を生かして、大学の運営に貢献することが求められています。　それが私たちの賜物を生かして歩む道なのです。　学生は学生の本物である学に力を入れ、自らの賜物を生かして、社会に貢献する道を捜し求めることが大切な使命です。

現在のICUには、多くの課題があります。献学されて６０年が経過し、本館、一部の学生寮、教員住宅、理学館等が老朽化しています。　ICUの次の６０年に備え、日本におけるリベラル・アーツ教育を本格的に実現するためには、リベラル・アーツ教育に相応しい本館の建設も必要だと思います。　さらに、世界で活躍できるグローバル人材を育成することも、我々の大切な使命です。　そのためには、優れた教職員による少人数教育の充実が必要ですが、これを実現するための財政面での制約があります。　また、ICUの優れた教育の成果が日本社会の中では、十分に理解されていません。　さらに、キリスト教徒が少ない日本の現状の中で、教員に対する「キリスト者条項」をどう守って行くのかという問題もあります。　しかし、日本社会はICUが行っているリベラル・アーツ教育を必要としており、優れた教育環境を構築して、優れた学生を育てることは、私たちの大切な使命です。
６０年前に、ICUを献学した先人たちは、何も無いところからICUを作られたのです。私たちは、常にその苦労を思い出さなければなりません。　ICUに連なる私たちが、そ

れぞれが持つ優れた賜物を生かし、喜びをもって神様の示す道に従って、助け合うことによって、ICUは前進できるのです。

ローマ人への手紙８章２８節には、「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」と書かれています。

私たちは、それぞれの賜物を生かして、「未完の大学」を前進させる使命を担い、「神と人に仕える人材」を育てるために、次の60年に向けて力強く歩み出したいと思います。　その行く手には、祝福された結果が備えられていると思います。

一言、お祈りをいたします。

ご在天の父なる神様

今日、私たちはこうしてあなたが建てられたICUの献学60周年の記念礼拝を共にもつことができました。

あなたが建てられたこの大学が、神と人に奉仕する人材を育てる大学として、日本の社会の中で、そして世界の中で発展してゆく上に、どうかあなたのお導きを与えて下さいますように。

そして私たち一人一人このICUに集う者が、それぞれが持つ賜物を活かし、あなたから与えられた賜物を使ってこの大学をさらにより良い大学として前進させてゆくことができますように、全ての道においてどうかあなたが導きを与えて下さい。

そして私たちの労苦を癒して下さいますように。

ICUが次の60年に向かって力強く歩み出すように、どうかあなたの支えがありますように。

今日この時多くの人たちと共にICUの60年の歩みを祝い、そして次の60年に向かって歩み出す、その大きなきっかけとなる礼拝をこうしてもつことができたことを心から感謝いたします。

どうかあなたがいつも私たちの上にいて、このICUの発展を支えて下さいますように。

あなたの導きと御恵みを感謝し、主イエス・キリストの御名をとしてお祈りいたします。

アーメン